

**セルフヘルプ・グループの機能を活かした認知症高齢者の支援に関する研究****－認知症の人と家族の会A県支部の取り組み－**

○九州看護福祉大学 氏名 福崎 千鶴 (会員番号 6859)

キーワード：認知症高齢者の支援 セルフヘルプ・グループ 家族の会

**1. 研究目的**

超高齢社会は、介護期間の延長や医療支援、経済保障など様々な課題を生み出している。認知症高齢者の中でも、初期や軽度の高齢者の場合、適切な支援に結びつかない場合も少なくない。認知症高齢者が望む地域での暮らしを支えるためには、保健・医療・福祉・教育及び研究の統合的支援が求められる。本研究は、認知症の人と家族の会（以下「家族の会」と略す）の取り組みを参考に、セルフヘルプ・グループの機能を活かした認知症高齢者の支援について考察する。

**2. 研究の視点および方法**

家族の会A県支部の会員を対象に、2015年2月～3月にかけて面接調査を実施した。調査は家族の会A県支部の会員10名に調査協力を依頼した。面接の内容は、①家族の会に入室した経緯、②社会変化と家族の会の機能の変化（地域組織と全国組織）、③A県支部の支援の現状と課題、④家族の介護・看取りと社会的活動について半構造化面接を行なった。データの分析は、木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に概念化を試みた。

**3. 倫理的配慮**

この調査は、筆者から家族の会A県支部に直接お願いし、承諾した方のみに面接調査を実施した。面接調査実施にあたり、話しにくい内容については話せる範囲で構わないことやプライバシーの厳守について文書と口頭で説明した。面接は、プライバシーに配慮し個室で行った。面接内容は、ICレコーダーに録音すること、データの保管と処分まで、面接内容のデータは厳重に保護されることを説明し、同意が得られた協力者のみに面接を実施した。また、個人が特定されないように、名前、年齢、性別、地域等のデータの取扱いに注意したうえで一部加工してまとめた。

**4. 研究結果**

面接を行った10名中6名が保健・医療・福祉職の経験者であり、現在認知症の家族を介護中の人は4名であった。家族の会は、結成当初から介護家族だけではなく、専門家や認知症に関心のある様々な分野の人が会員としてセルフヘルプ・グループの中心で積極的に活動に参加していた。本研究において生成した中核カテゴリーは、【認知症の正しい認識や支援の拡大】であった。セルフヘルプ・グループと専門職などのボランティアが協同することによる効果として、下記の4つの機能による認知症高齢者の支援が行われていた。

家族の会は、①セルフヘルプ・グループ機能と、②ボランティア機能と、③研究及び資

源開発機能、④公的機関への協力機関の機能をもち、認知症の人と家族への先駆的な支援を行っていた。これらの機能は、高齢化率の増加に伴い機能や支援は柔軟に変化していた。

## 5. 考察

【認知症の正しい認識や支援の拡大】により、望む暮らしが可能となる。しかし、現状では認知症についての正しい認識が社会に浸透していないため、適切な支援に結びついていない可能性が高いことが示唆された。家族の会では、結成当初から専門職など様々な人が当事者の視点でセルフヘルプ・グループの中心で活動していた。認知症の人や専門職などが活動に関わり、保健・医療・福祉・教育及び研究の統合的支援が行われていた。つまり、家族の会では、認知症の人や家族と専門職が協同して活動を行うことにより、根拠に基づいた質の高い支援が行われていることが伺われた。

セルフヘルプ・グループでは、潜在的な資源の掘り起こしや資源開発、人を含めた資源を育てることを大切にしていた。資源開発や資源を育てることは、認知症高齢者支援システムを構築する上で最も大切なことと思われる。本研究では認知症の人や介護家族など、全ての人を資源として機能しうる存在であり、制度も含めた資源を育てることの大切さが示唆された。

### 【文献】

- ・木下康仁（2003）.『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.

